

聖書を読む時の注意点

原田元道

文学としての聖書

- ・ 文章のメッセージ性に注意
 - 識字率の低い 2000 年以上前に文章を書き記そうとした人は余程何かを伝えなかった
→ 聖書作者が想定している読者と伝えんとするメッセージを理解する(例：ヤコブ 1:1-2)
 - ⇒ 分からない箇所は(あまり)気にせず「妙に引っかかる」「心に残る」箇所を重点的に読む
- ・ 文章の書き方(ジャンル)に注意
 - 聖書のメッセージの伝え方(文学様式・ジャンル)は一通りではない
 - ◇ 物語(narrative) : 英雄物語、預言者談、喜劇、遺訓など
 - ◇ 法令(law)
 - ◇ 詩歌(poetry) : 祈り、歌、礼拝式文など
 - ◇ 預言(prophecy) : 災いや救いの預言に関する哀歌、讚美歌、礼拝式文など
 - ◇ 知恵文学(wisdom) : 格言、教訓など
 - ◇ 福音書(the Gospels)
 - ◇ 書簡(手紙)(epistle)
 - ◇ 黙示文学(apocalypse)
 - ジャンルごとに味わい方が異なる
← 日本の「小説」と「短歌・俳句」では味わい方が異なるのと同じ
 - ⇒ ジャンルの違いを知れば味わい方が広がる
- ・ 文章の文脈(前後関係)に注意
 - 言葉の意味は文脈で決まる
← 国語辞典にも一つの言葉に大抵は複数の意味が載っている
→ 話の流れ(前後関係)を考慮しながら言葉および文章の意味を理解する
「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。」(フィリピ 4:13)
 - ⇒ 一節だけを抜き出すのではなく、段落(話の塊)ごとにまとめて文脈(前後関係)に沿って読む

古典としての聖書

- ・ 年代(時間)の隔たりに注意
 - 聖書内の一番新しい書物は紀元 100 年頃に書かれた
 - 日本に現存する最古の書物は紀元 615 年に書かれた「法華義疏(ぎしよ)」(作：聖徳太子)
 - ⇒ 「古文・漢文」を読むような心意気をもつ
- ・ 距離(空間)の隔たりに注意
 - 聖書の話は「外国」の物語
 - ◇ 片仮名がたくさん出て来る
 - ◇ 馴染みのない地名ばかり出て来る(例：申命記 1:1)
 - ◇ その土地の地理的特徴をいちいち説明してはくれない
 - ⇒ 片仮名が出てきても驚かず、出来れば、聖書以外の参考書(スタディバイブル、辞典、注解書などで調べてみる
- ・ 「当たり前」の隔たりに注意
 - 2000 年ほど前の近東地方(バルカン諸国、トルコ、シリア、エジプトなどを含む地域)の人々の「常識」「価値観」と 21 世紀の日本に生きる私たちの「常識」「価値観」は異なる
 - 科学的価値観の違い
→ 科学的な疑問に聖書が答えてくれるとは限らない
→ 聖書は当時の人々が抱いていた人生の意義・意味に関する疑問に答える
 - 「歴史」についての認識の違い

←聖書作者は現代の歴史家ほど忠実に過去の出来事を書き残そうとはしていない
 →大事な質問は「この出来事は本当に起こったのか？」ではなく「この出来事・表現とあの出来事・表現はどのような関係があるのか？このように話を書き進めることで、筆者は何を言わんとしているのか？」

⇒聖書が語ろうとするメッセージを理解する

聖典としての聖書

- ・ 究極的な作者(神)の存在に注意
 - 聖書は神の霊感(聖霊)によって書かれた(Ⅱテモテ 3:16 ; Ⅱペトロ 1:20-21)
 - 聖霊の助けを祈り求める
 - ←祈りだけでは不十分で人間の努力(学ぼうとする意志や学ぶための時間や労力)も必要
 - 聖書の主役・主人公は三位一体なる神様であることを意識する
 - ←聖書には「英雄」や「お手本」となる理想的人物はイエス以外にまずいない
- ⇒聖霊の助けを祈り求めながら、絶えず「神様・イエス様について分かることは何か?」「神様・イエス様が私に望んでいることは何か?」ということ意識しながら読む
- ・ 究極的な作者(神)のメッセージに注意
 - 神様は時と場所を超えて私たちに語りかけることができる
 - 「神様は今、この場所で私に～するように願っている」というメッセージを受け取る
 - 神様からの語りかけか自分の思いかを見分ける
 - ◇ 聖書が書かれた当時の人々の状況や問題を理解する
 - ◇ 聖書における文学的特徴・手法(言語、ジャンル、比喩的表現、修辞法など)を考慮しながら、文脈に沿ってメッセージを理解する
 - ◇ 聖書で聖書を理解する←聖書の他の箇所との整合性を調べる

まとめ(聖書を読む時の注意点)

1. 神様からの語りかけと聖霊の助けに期待する(祈る)←聖書は「神の言葉」
2. 科学的価値観の違いや「歴史」に対する認識の違いを考慮した「正しい質問」をする←現代の私たちの「常識」「価値観」の枠組みを聖書に押し付けない
3. 可能な限り、当時の人々の状況・問題を想像しながら、文脈に沿って、聖書の作者がその当時読んで欲しいと思っていた読者に向けたメッセージ(の大枠)を読み取ろうとする
4. 「分からなくて当たり前」くらいの気持ちで、分からないところ・分かりにくいところを飛ばしながら読み進める←様々な「隔たり」が存在
5. 当時の人々の状況・問題と自分の現在の状況・問題が似ていると感じる箇所、または「妙に引っかかる」、「心に残る」箇所を重点的に読み進める←神様からの語りかけ
6. 常に「神様・イエス様について分かることは何か?」「神様・イエス様が望んでいることは何か?」ということ意識しながら読む←主人公は神様・イエス様

(余裕があれば)

- 当時の人々の地理的・社会的・文化的・歴史的背景、および文学的特徴・手法(言語、ジャンル、比喩的表現、修辞法など)を学ぶ
- 自分が聖書から受けたメッセージと聖書の他の箇所との整合性を調べる